

スペイン語圏を知る本(その42)

ホセ・マリア・プラサ著『ふしぎな動物モオ』

(坂東俊枝・吉村有里子 共訳、行路社 2006)



評者 坂東 省次

訳者は、この物語を「子どものアイデンティティ確立の物語」と説明している。しかし、筆者は、この物語を「巣立つ子どもへのエール」と、とらえてはどうだろうかと考える。冒頭の「はじめて目についた世界は、とても魅力的に見えたのです」という一文の通り、子どもたちは、広い世界に向けて巣だってゆく。自由を求めて、自己追求の心の旅へ。そこで、果てしなく傷つき、悩み、困り、失敗を重ね、挫折を味わう。本当の意味での子どもの自立のためには、そこから再び強い心を取り戻すという作業をすることが肝要である。これこそ、子供たちに足りない文科省はじめ、教育に携わる大人がやっきとなっている『生きる力』にほかならない。それは、著者が、主人公に語らせるこの一文に象徴される。『大事なのは、ぼくがだれであるかではなくて、ぼくがぼくであることなんだ』この真実に気づいた時こそ、子どもは、大人への入り口に立てるのだ。

人生とは、まさに『自分探しの長い旅路』である。しかし、子どもが安心して旅立つためには、いつでも心のふるさとが根底にあることが、大きな柱となる。心のふるさとには、親や友人や仲間のあたたかさがある。旅を終えて帰ってきたモオがたずねる。「ぼく、どんなふうに見える?」「寝ぐせをつけて、やせて、そして中味は友達みんなとおんなじだ。」・・・なんと優しい受け入れ方なのでしょう。これこそが、痛々しい現代に最も欠けている視線ではないだろうか。昨今、連鎖反応のようにいじめ、あるいは心の問題による子どもたちの事件・事故が増加している。今こそ、改めて大人が見落としてきた『大事なもの』を再確認するべき時であると、声を大にして言いたい。そう言った観点から見れば、この書は児童書でありながら、大人のための啓発書ともとれる物語だ。

「子どもたちよ、どこにでも羽ばたいてゆくがいい。たくさん失敗し、困惑し、悩み、傷つくがいい。でもこれだけは言っておく。君たちの心のふるすとは、生まれ育ったこの町であり家庭であり、保護者であり友人であり恩師でもある。もし、本当に傷つきボロボロになった時こそ、私たちはいつでも君たちを受け止める準備をして待っている、そのまんまの君たちを・・・」とのエールを今こそ、子どもに発信するべき時ではないのだろうか。本書は何度も読むうちに、そのようなことを考えさせてくれる「心の童話」と言える。読めば読むほど味わい深さを増すこの一冊は、大人の童話として、ぜひ大人の方にも読んでいただきたい。

最後に、この訳書の最たる特徴は、主人公の姿形が規定されていないことである。創作手法の第1歩は、まさに主人公をくっきりと描写することに始まると言っても過言ではないのだが・・・。古今東西、古書新書、さまざまな書物をひもといても、最後まで主人公の姿形が不明である物語には、ついぞお目にかかったことがない。姿形を想像する楽しみを読者に与えつつ、なおかつ、はっきりとした人格をモオに与えてゆく手法こそ、著者ホセ・マリア・プラサの卓越した点であるとも言える。活字離れが著しい現代にあって、このような物語こそ、人形劇あるいはペープサート等でも上演していただき、ぜひとも子どもたちに『想像の楽しさ』を味わわせてやってほしいものだ。

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)